

取組の概要

対象畜種

豚

協議会構成員

畜産農家（4組織）、耕種農家（3地域）、みどりの農業協同組合、全農宮城県本部、北日本くみあい飼料（株）、日清丸紅飼料（株）、みやぎ生協、あいコープみやぎ、（株）エーコープ宮城、（株）加工連、田尻地域水田農業推進協議会、大崎市、宮城県北部地方振興事務所、宮城県美里農業改良普及センター

飼料用米生産面積

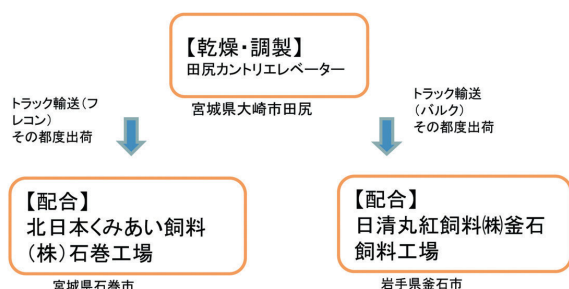
59.0ha

供試品種

べこあおば等 15.0ha
まなむすめ 44.0ha

取組内容

①飼料用米の流通、保管、調製に係る実証調査



- ◆主食用米との区分を図るため、生産者は3地域（田尻、沼部、大貫）の114戸で栽培。
- ◆収穫物はカントリーエレベーターに一括集荷。生粳を区分荷受けし、送風乾燥後、長期保管可能な適正水分で貯蔵、定期的に出荷数量にあわせ粳摺りをする体制。
- ◆カントリーエレベーターから工場までの移送は、飼料会社の手配により確保し実施。

②飼料用米の給与による家畜・畜産物への影響調査（畜産物の成分分析を含む）

試験設計：飼料用米0%、7%、15%配合飼料による給与試験

試験期間：平成21年3月～平成21年5月

試験農場：JAみどりの田尻宮農センター管内の養豚場

試験方法：肥育後期の60日間、飼料用米(0%, 7%, 15%)配合の飼料を不断給餌。1区当たり4頭×3区

調査項目：肉質調査（脂肪酸組成、肉色、脂肪色など）、発育調査（期間増体重、飼料摂取量など）

③飼料用米を利用した畜産物の普及活動

- ◆「たじりのおこめ豚」紹介PRパンフレットの作成・配布

取組によってわかったこと

1. 調製・保管・流通について、次のことがわかりました。

- 利活用者への需要に応じた出荷時期・バラ出荷等によるコスト低減を目的にカントリーエレベーターで一括集荷・乾燥調製保管の体制で取組んだ結果、収穫から集荷までの管理体制が容易で期待したとおり順調にすんだ。
- 保管場所が乾燥施設と一体化しており、貯留タンクでの長期貯蔵ができ、倉庫への移動や保管といった作業がなく、軽減できた。
- 飼料用米の生産に係る経費低減は難しいが、調製・保管・流通に係るより一層の経費低減策については、消費者や各関係者との協議を進め、相互理解を得ていくことも必要と思われる。

2. 家畜・畜産物への影響について、次のことがわかりました。

- 飼料用米配合飼料の嗜好性は対象区（0%）と比較しても遜色なく良好で、発育や脂肪付着度についても大きな差は認められませんでした。
- 飼料用米配合飼料の給与豚の肉色は淡く、脂肪色が白くなる傾向が伺えました。
- 飼料用米配合飼料の給与豚の肉質は、オレイン酸やリノール酸等の不飽和脂肪酸の含有量が増えるなど脂肪酸組成に影響を与えることがわかりました。
- 飼料用米配合の給与試験については21年度も同様に発育性や肉質に係る給与実証試験を行っていきたいと考えています。

3. 普及活動について、次のことがわかりました。

- 飼料用米に対する関心は利用者・消費者ともに高く、今後も飼料用米の生産から利用に係る関連情報を収集・提供していくことで、消費の拡大が見込まれる思う。
- 飼料用米に関する各種打合やPR活動を通じ、耕畜連携の取り組みが進んできている。
- 飼料用米の高位安定生産を図るためにも、本県により適応した飼料用稲品種の開発や栽培管理技術の向上に向けての取り組みが望まれる。
- 商品化され現在流通している豚肉ブランドの定着と販促拡大を進めていく必要がある。

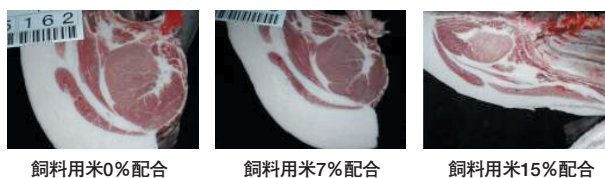
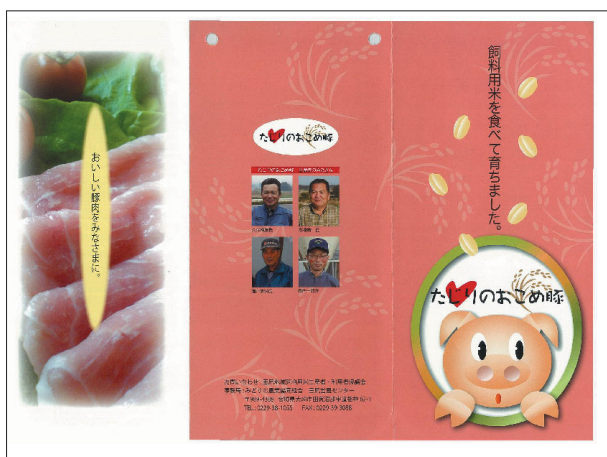
4. 今後の飼料用米の取組予定などについて

- 水田の有効活用に向けた推進協議会の体制強化
- 飼料用米の栽培、利活用に関する情報の収集
- 飼料用米配合割合を30%程度までに高めるための給与試験等データの蓄積と飼料用米の生産性の向上。

J A みどりの 田尻営農センター
伊藤 成公、氏家 壮一

参考データ・写真等

「たじりのおこめ豚」紹介PRパンフレット



店舗内の肉販売コーナーでの試食会



畜産農家視察受入



産直豚生産者



飼料米